村岡中校区の教育環境について

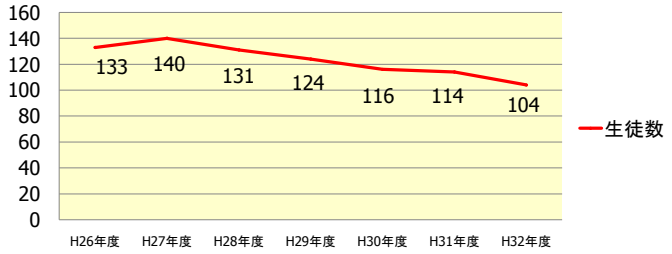
◆村岡中学校の生徒、村岡小学校、兎塚小学校、射添小学校の児童数の推移

村岡中学校の生徒数の推移を見てみると、平成 32 年度には、104 人になると見込まれます。

【図１】

村岡中学校生徒数の推計（平成32年度まで）

	学年	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	H31年度	H32年度
村岡中学校	1年	50	45	36	43	37	34	33
	2年	45	50	45	36	43	37	34
	3年	38	45	50	45	36	43	37
	計（人）	133	140	131	124	116	114	104

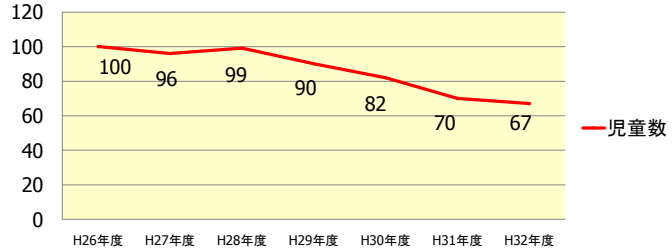


次に村岡小学校の児童数の推移を見てみると、平成 32 年度には、全校生は 67 人になると見込まれます。

【図２】

村岡小学校児童数の推計（平成32年度まで）

	学年	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	H31年度	H32年度
村岡小学校	1年	12	12	18	11	10	7	9
	2年	19	12	12	18	11	10	7
	3年	18	19	12	12	18	11	10
	4年	20	18	19	12	12	18	11
	5年	15	20	18	19	12	12	18
	6年	16	15	20	18	19	12	12
	計（人）	100	96	99	90	82	70	67

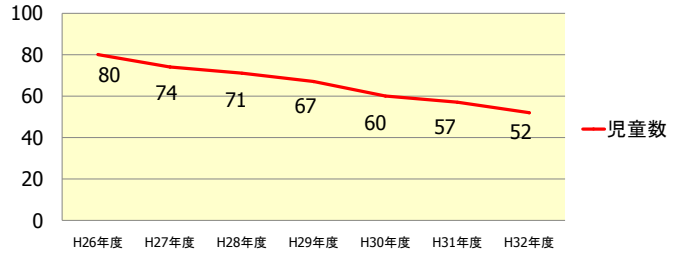


兎塚小学校の児童数の推移を見てみると、平成 32 年度には 52 人になると見込まれます。

【図３】

兎塚小学校児童数の推計（平成32年度まで）

	学年	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	H31年度	H32年度
兎塚小学校	1年	11	12	9	11	6	8	6
	2年	11	11	12	9	11	6	8
	3年	13	11	11	12	9	11	6
	4年	15	13	11	11	12	9	11
	5年	12	15	13	11	11	12	9
	6年	18	12	15	13	11	11	12
	計（人）	80	74	71	67	60	57	52

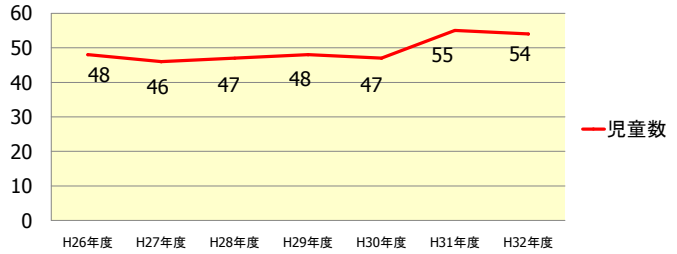


射添小学校の児童数の推移を見てみると、平成 27 年度と 28 年度に複式学級が編制されますが、29 年度に複式学級は解消され、平成 32 年度には 54 人になると見込まれます。

【図４】

射添小学校児童数の推計（平成32年度まで）

	学年	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	H31年度	H32年度
射添小学校	1年	10	9	10	9	5	12	9
	2年	4	10	9	10	9	5	12
	3年	6	4	10	9	10	9	5
	4年	8	6	4	10	9	10	9
	5年	9	8	6	4	10	9	10
	6年	11	9	8	6	4	10	9
	計（人）	48	46	47	48	47	55	54



◆小規模校について

国は、小学校の学級数の標準規模を１校当たり 12 学級以上 18 学級以下と定めており、これを下回る 11 学級以下の小学校が小規模校といわれており、町内では香住小学校を除く９校が小規模校です。【図４】

【図４】

小規模校とは、どんな学校？

学校規模の定義（小学校の場合）

11学級以下	小規模校
12学級以上 18学級以下	標準規模校

↑　香美町では10小学校中
香住小学校を除く9校が小規模校です。

兵庫県では、公立小学校における学級の編制基準は、【図５】のとおり、１年生から４年生までが１学級 35 人、５年生と６年生では１学級 40 人、公立中学校では、１学級 40 人と決められています。

この人数を超えた場合、複数の学級にわけられることになりますが、これはあくまでも上限の基準です。

【図５】

1学級の人数は決まっているの？

新学習システムの学級編制基準（兵庫県・公立小学校の場合）

学年	1学級の児童数
1年生～4年生	35人
5、6年生	40人

（兵庫県・公立中学校の場合）

学年	1学級の生徒数
1年生～3年生	40人

国際的にみると、平均学級規模は、ＯＥＣＤ加盟国平均で小学校 21 人、中学校 23 人となっています。また、WHOでは、小学校で 16 人までの学級規模が望ましいとしており、公立小・中学校の教育環境としては、小規模、少人数指導が世界の流れとなっています。

◆複式学級について

複式学級とは、学級編制の方式で、学年の異なる２つの学年以上の児童を１学級に編制した学級のことです。

具体的には、となり合う２つの学年の児童の合計人数で決められており、１年生を含む場合はとなり合う学年の児童数が８人以下の時、複式学級を編成します。【図７】

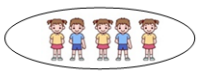
【図７】

複式学級　（となり合う2つの学年の児童の合計人数）

【例】１、2年生の場合

1年生を含む時	8人以下
2～6年生	14人以下

8人＝複式学級になる



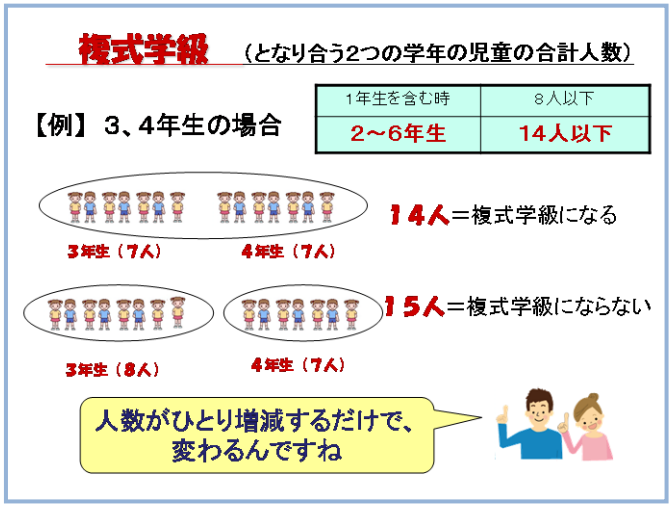
9人＝複式学級にならない

1年生を含む場合は8人以下の時、
複式学級を編成します。

２年生から６年生の場合は、となり合う２つの学年の児童数が１４人以下の場合、複式学級を編制することになります。

複式学級では、基本的に１人の教師が２学年の児童に同時に授業を行います。【図８】

【図８】



【図９】は長井小学校の算数の授業風景です。３年生と４年生が、背中合わせで別々の単元を習い、教師は両学年に課題を与え、交互に指導を行っています。国語、算数、理科、社会については、学年の発達段階に応じた教科内容の系統的な指導に配慮して、学年別の授業を行います。

射添小学校でも単元によっては、このような授業を行う場合もあります。

【図９】

また、生活、音楽、図画工作、家庭科、体育、道徳、総合的な学習は、２学年同一内容の授業を行い、２年間を見通した教材内容としています。【図１０】上の学年に下の学年をリードさせるなど、学年差を生かした授業を展開しています。

【図１０】

複式学級を編制するような少人数の小学校については、

- **２学年を１人の教師が教えるため、複式学級のない学校と比べて教員数が少ない。**
- **子どもの数が少ないため、多人数の授業ができない。**

などの課題があります。

◆小規模校について

平成２６年２月に実施した教育環境についてのアンケートでは、保護者や町民の皆さんから、小・中学校の教育面の不安について、次のような意見があげられていました。【図１１】

【図１１】

教育環境アンケートから・・・

（小規模校の教育面の不安について）

- **人数が少なすぎると、学力や能力を向上させる機会が少ないのではないか。**
- **人間関係が固定化され、序列化されるのが心配。**
- **多人数の中で刺激を受けてほしい。人数が多い方が活気がある。**
- **チャレンジプランといっても限界があるのでは？**
- **部活に選択肢がほしい。**

しかし、一方で

- **小規模校ほど子どもと教師の一体感があり、子どもたち一人一人に目をくばり愛情をもって教育することができる。**
- **一人一人の個性や能力をしっかり把握し、個人差に応じたきめ細かい個別指導を行うことにより、個性や能力、可能性を認めて伸ばすことで自ら学ぼうとする力を身につけさせることができる。**
- **地域の人たちとの関わりの中で、地域に根差した教育活動を行っており、一人一人がふるさとのよさをしっかり学ぶことができる。**

などがあります。

◆子どもたちの教育環境について

子どもたちの教育環境について考える場合、**ヒト**、**モノ**、**お金・財源**を見ていく必要があります。

【図１２】

まず、**ヒト**についてですが、児童、教職員、保護者など学校に直接的に関わるヒトだけでなく、見守り隊、ふるさと教育応援団、地域住民、公民館や各種団体など、学校を取り巻くヒトたちも貴重な教育資源といえます。【図１２】

教職員１人当たりの児童生徒数は、香美町では小学校８人、中学校８人で、都市部と比べて手厚く配置されています。

児童生徒当たりに多くの教員が配置されているので、全教職員が様々な教育活動や行事、日常生活の中で、全校生に担任のように、より効果的な指導を行っています。

次に**モノ**については、学校を取り巻く自然環境や社会的環境、家庭環境、学校施設がそれにあたります。村岡の山や川、田畑、豊かな自然環境や温かく、ぬくもりのある家庭や地域もすぐれた教育環境であるといえます。

学校施設は、子どもたちが一日の多くを過ごす学習や生活の場であり、地震などの災害が発生した場合、地域の皆さんの避難場所、防災の拠点として重要な役割を担います。

次に**お金・財源**については、学校の教職員や学校の維持管理に、町はたくさんお金がかかっているのか聞かれることがありますが、小・中学校の教職員は香美町の地方公務員ですが、その人件費は国と兵庫県から支出されています。

また、小・中学校に対しては、国から町に地方交付税というお金が入ってきます。義務教育は、憲法上の国民の権利・義務に基づき行われるもので、国は国民が全国どこでも一定の内容と水準の教育を受けられるよう保障する責任を負っているため、学校の人件費や維持経費の多くは国や県が負担しています。

村岡中学校の校舎・体育館は、平成元年の新築で、耐震基準を満たしており耐震化の必要はありませんが、25 年経過しているため、村岡小学校の次には、大規模改修を検討していきます。

村岡小学校の校舎・体育館は、昨年から今年度にかけて、耐震改修と改築を行っています。

兎塚小学校の校舎は、昭和 47 年に新築し、平成 11 年に耐震改修を行っています。体育館は、平成 27 年度に耐震改修を行う予定にしています。

また、射添小学校の校舎は、昭和 51 年に新築し、平成 15 年に耐震改修を行っています。体育館は、平成 27 年度に耐震改修を行う予定にしています。

町の財政が厳しいなら、早く学校統合すればいいのに、という意見をお聞きすることがありますが、学校統合すると、国からの交付税も減ることになるので、町の財政が必ずしも楽になるとは限りません。

ヒト、モノ、お金・財源については、今の子どもたちや地域のあるべき姿を見ながら、５年先までを見通して、学校のあり方を描いています。

◆学校統廃合について

文部省（現：文部科学省）は昭和 48 年に公立小中学校の統合について次のような通達を出しています。

・学校規模を重視した無理な統合は避ける。
・総合的に判断し、存続し充実する方が望ましい場合もある。

しかし、やむを得ず統合する場合は、

・児童生徒の通学上の影響、安全面、教育活動の実施への影響などを十分検討。
・地域住民の理解と協力を得る。
・統合後の学校の問題や児童生徒への教育効果に及ぼす影響などの問題点を慎重に比較考慮。

町としては、学校統廃合にあたっては、これらの点を十分考慮して、慎重に判断していきたいと考えています。

学校は、子どもたちを教育する場ですが、同時に地域づくりや活性化という観点からいえば、その地域の担い手、人材を育てる場であり、地域を支えている拠点です。

学校がなくなるということは、子育て世代が子どもを育てる拠点がなくなり、地域の拠り所がなくなるわけですから、廃校になった地域の事例を見てみると、人口が流出し、地域の衰退が進んでいくことが報告されています。

小規模、少人数だと、子どもの学力は大丈夫なのかと心配されますが、学校統合について検討する場合、児童生徒数だけで判断するのではなく、学力保障を第一に考える必要があります。

学力保障という点については、まさに、きめ細かい指導ができるのは小規模、少人数の学校が有利だといえます。

しかし、何といっても、子どもたちの学力を伸ばすには、教師の指導力や指導の仕方が大きく影響してきます。それでは、先生たちは、どのように指導力を高めているのかというと、学校の内外で日々研究や研修を行っています。教育委員会では、研修の機会を保障するとともに、指導主事などのスタッフにより学校への指導・助言を行っています。

合同授業として全学年で行うチャレンジプランは、複数の教員が、授業形態を工夫しながら、多人数授業により効果的な指導を行う機会ともなっています。【図１３】

【図１３】

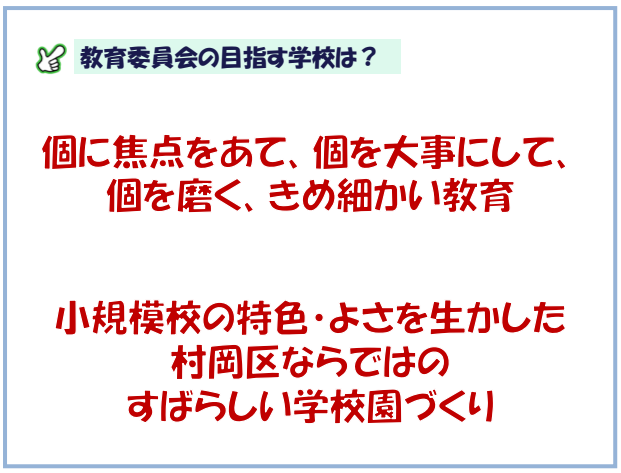
◆教育委員会の目指す学校について

これからの時代に求められるのは、さまざまな課題を受け止め、自分で考え行動できる、たくましい人づくりです。

小規模校では、人数が少ないので競争相手がいなくて、社会性やたくましさが育たないのではないかと一般的に不安に思われていますが、子どもたちに必要なのは自分に打ち勝つ力です。

子どもたち一人一人に丁寧に、個々に応じた目標をあげさせて、挑戦させ、最後までしっかりやりとげさせる。個に焦点をあて、個を大事にして個を磨く、そういうきめ細かい教育ができるのは、まさに小規模校の強みだといえます。

【図１４】



香美町の学校はほとんどが小規模校ですが、少人数のよさを生かした教育を進めています。
教育委員会としては、標準的な規模の学校による教育を目指すのではなく、地域の実情に応じて、小規模校の特色・よさを生かした香美町ならではの、村岡区ならではの魅力あるすばらしい学校園づくりを進めていきたいと考えています。

さまざまな課題が起こる現代社会において、地域の将来の存続は、次代を担う子どもたちがたくましく育ってくれるかどうかにかかっています。
今求められているのは、自立し、努力し、課題を乗り越え、自分で判断して進んでいける能力や志をもった人づくりです。そのような人こそ、香美町を元気にしてくれる人材になってくれるものと確信しています。
村岡区ならではの地域ぐるみの教育により、子どもたちをたくましく育てられるのです。